



破滅の足音



山岡 瑞雪

博子の目が大きく見開いた。結婚してから数回見たことのある、爆発寸前の表情である。真ん丸い目が、これでもかというほど大きくなった。

「それ、どういうこと？ 何で私たちが預からなきゃならないの？」

「お世話になった人のお孫さんなんだ。ご恩を受けた人の孫が、独りぼっちになったんだ。他に身寄りがなくて、今施設に入れられている。恩返しをしなきゃならんのだ」

「そんな……。突然、そんなこと言われたって」

驚愕をあらわにし、見開いたままの目をせわしなく動かしている。それをなだめるように、ことさら丁寧な口調でゆっくりと孝秋は言う。

「夏休み、小学校のキャンプに子供が行っていた間のことだ。買い物に出掛けた両親の車とトラックが正面衝突したんだそうだ。かわいそうに、両親とも一度に亡くしてしまったんだよ。かわいそうだと思うんか」

「世の中、かわいそうな人はいっぱいいるわよ。何でその子に限って引き取るの？」

「だから、言っただろ。ご恩を受けた人の孫だって」

「どういうご恩よ」

「一方ならぬお世話になったんだよ。昔、インターンのときに……。あの方がいなかったら、今の自分はなかった。詳しく話せば長くなるし、これ以上詮索することないだろう。頼むからご恩返しに協力してくれよ。君が頼りなんだから」

しまいには泣き落とししかない。孝秋は冷ややかな視線を浴びせる博子の足元に、手をついて深々と頭を下げた。

博子は寝つけない夜が続いていた。なぜ、夫は急にあんなことを言い出したのか。三浦なんて、今まで聞いたこともない名前だった。知らない人の子を、何で預からなきゃいけないのか。まさか、夫の隠し子では……。などと疑惑の念がムクムクと頭をもたげてきた。そうなるともう、この考えが瞬く間に博子をすっかり支配した。

(今までの私の人生は何だったのだろう)

優しく、財力もあり、社会的な地位もある医学者の妻として、何の不満もない人生だった。世田谷の高級住宅地に居を構え、夫は東都大学の医学部の教授であった。二人の男の子に恵まれ、長男の修一は優秀な医学生として留学中である。中学生になる次男の浩二は少し頼りないが、悪い子ではない。成績があまりよくないから医者はどうも無理なようだが、機械いじりが好きで、彼は彼なりの道を歩むだろう。

これからも、磐石な家庭のはずであった。それなのに、何で他人の子が紛れ込んでこなければならないのか。それによって起こるに決まっている波乱が想像され、不安と恐怖感に苛まれた。

(そうだ。きっと、その子は夫の子に違いない。今まで気づきもしなかった。相手はどんな女だったのだろう。浮気をして帰ってきた日、夫は私をどんなふうにごまかしたのだろう。もしかして、ごまかすために優しく私を抱いたのだろうか。まさか、今でもずっとその女と……)

博子は怖気立った。もう二度と夫に触られたくないと思った。疑心は大きな妖怪みたいになって、博子の神経を蝕んだ。

いよいよ、孝秋が施設に迎えに行くという日の前日の夜、とうとう博子は爆発した。

「あなた！ その子はあなたの子でしょ」

「何をばかなこと言ってるんだ。そんなはずないだろう」

即答する孝秋の目に、一瞬動揺の色が走ったのを博子は見逃さなかった。

「嘘つき！ そうでなきゃ、九州くんだりまで引き取りになんか行くものですか」

「何回言えば分かるんだ。恩を受けた人へ恩返しをしようというのに、お前は私を人でなしにしようと言うのか」

「あなたはもともと人でなしじゃないの。私や子供たちを苦しめようとするのよ」

泣きじゃくりながら、博子は言い募った。押し黙ったまま腕組みをして見つめる孝秋に向かって、博子は頭を混乱させながらわめき続けた。しばらくして、やっと冷静さを取り戻した博子に孝秋は口を開いた。

「お前には悪いが、私の決意は変わらない。もし、お前が協力してくれなくても、私はあの子を引き取るから」

覚悟を決めた夫の言葉に、博子は放心の態で固まってしまった。涙に汚れ、大きく見開いた目が一点を凝視したまま、その生気が失せた。時は止まり、重苦しい空気がどんよりと部屋の隅に澱んだ。

孝秋は宮崎に向かう飛行機の中で、昨夜の博子の顔や言葉を頭の中に巡らせていた。ここ数日の間に、目は落ち窪み、目の下に隈を作った妻の顔。あなたの子でしょと言われたとき、思わず狼狽してしまった。しかし、孝秋は引き取りに行く子の母親の顔も知らなかったし、その夫のことも何も知らない。

子供のできない三浦夫婦は、散々治療を繰り返した挙句、行き着いた不妊専門病院で精液の提供を受けた。そして、その提供者が孝秋であった。不妊専門病院の院長は、東都大学の出身で、当時の孝秋の上司である教授と懇意であった。研修医や学生の精液が精子バンクを通じて役立てられたのである。もちろん堅く秘密は守られて、お互いにお互いを知ることはなかった。いや、ないはずであった。しかし、孝秋は知人の不妊専門医のつてを通じて調べ、その後も、内密に情報を得ていた。

自分の遺伝子を持った子供の状況だけは知っておきたかった。その母とセックスをしたわけではないが、自分の精子は彼女の卵子に突入し、結合し、受精卵は彼女の胎内に着床した。何と浅からぬ因縁ではないか。生まれた子供はその母の夫の子ではない。父親は自分なのだ。その子の将来に責任を感じてしまうのは当然であろう。

宮崎に着いた。空が抜けるように青い。初夏の爽やかな風が孝秋の頬を優しく撫でた。温暖な気候は、ゆったりとした気分させる。空港から市内行きのバスに乗り換えた。宮崎市街をゆっくりと走る。丈の高いフェニックスの木が、次々と窓の外に現れては後ろに去っていく。町のいたるところにこのフェニックスが見られ、南国情緒を漂わせている。空気がまるで違って、時の刻み方が緩やか過ぎるほど緩やかに感じられるのである。同じ日本でも南のほうはこうも違

うものかと思いき、フェニックスを目で追いつけた。バスセンターから更に野尻行きのバスに乗り換える。バスは市街を抜けて、だんだん山間に入っていく。一時間半ほど走って、やっと目的の町にたどり着いた。山深い片田舎である。しばらく歩いた所に、その施設はあった。

施設長から手を引かれて、少女が部屋に入ってきた。うつむき加減で、口をきつと結んでいる。何となく、口元が自分に似ていると思った。施設長の後ろに隠れようとしながら、上目遣いでおずおずと孝秋を窺う。今この子にとってはすべてが外敵であろう。小さなわが身を守ろうとする防御反応が痛々しかった。

「さあ、詩織ちゃん、新しいお父さんだよ。ご挨拶しなさい」

白髪で長身の施設長が、身をかがめて優しく言った。

「詩織ちゃん、よろしくね」

孝秋は、しゃがみこんで詩織の顔を覗き込んだ。ますます詩織はうつむいて、口をきつく閉じたままである。

「今日から私がお父さんだ。家にはお母さんと、お兄ちゃんが待ってるよ。一緒に帰ろう」

やさしく言い聞かせるように、孝秋は声を掛けた。

手続きを済ませ、二人は施設から外に出た。

「元気でねー、詩織ちゃん」と、施設の人たちが手を振った。詩織はちらつと振り返ったが、何も言わずとぼとぼと歩く。まだ十歳のいたいけな少女が、突然やってきた見知らぬ男性に行ったこともない地へ連れて行かれるのだ。孝秋の胸がきゅんと締め付けられた。何とかこの子を守ってやりたいと思った。詩織の小さな手をとると、詩織はおとなしく手を引かれて歩いた。握り合った手から温もりが流れて伝わった。

玄関を開けると、博子が顔を出し、孝秋に鋭い一瞥を投げてよこした。しかし、その顔が詩織に向けられたときには、もう満面の笑みを浮かべている。

「まあ、あなたが詩織ちゃん？ 待ってたのよ。さあ、上がってちょうだい」と、抱擁せんばかりに部屋に迎え入れた。テーブルには所狭しとご馳走が並べられている。

「おなかすいたでしょ。詩織ちゃんがおいしいと思ってくれるかどうか心配だけど、いろいろ作ってみたから、うんと食べてね」

孝秋は心の中で舌を巻いた。本当にいそいそと嬉しそうな妻の様子なのである。

「ああ、その前に着替えましょ。こっちにいらっしやい」

そうして、詩織は花柄のブラウスと赤いスカートに着替えさせられて、恥ずかしげに、それでいて少し口元を緩ませて食卓に着いた。次男の浩二が、一体何事なんだという顔で、母親似の目を丸くして見ている。

「詩織ちゃん。お母さんにお兄ちゃんの浩二だよ。浩二、妹の詩織だ。今日から家族の仲間入りだ。よろしく頼むよ」

浩二は戸惑いを見せながらも、かわいい女の子がまんざらでもないらしく、ただにこにこしている。孝秋はほっとする思いで、博子の横顔を見た。化粧の下に、目の縁の隈が見える。きつとずいぶんと悩んだのだろう。そして、新たに女の子の母となろうと決意したのだろうか。頭が

上がらなくなったなど思った。

その夜、博子がつぶやくように言った。

「子供に罪はないわ。あなたを信じるしかないしね」

二人の兄

家族に女の子が一人増えて、孝秋はなんだか華やいだ色彩を感じた。博子はまるで着せ替え人形みたいに、詩織にかわいい色とりどりの服を着せた。浩二も必要以上に世話を焼いた。二人はたちまち仲良しになった。詩織はおっとりした心根の優しい子であった。施設で初めて会ったときの、あの外界のすべてから身を守ろうとするかたくなに結んだ口元は、母や兄の思いやりに氷解したのであろうか。いつも緩やかにほほ笑みをたたえていた。

しかし、突然葉山家に女の子がやってきて、突然小学校に入ってきた。近所の目や、学校の子供たちの目はやっかいであった。

近くの小学校に編入した二日目のこと、詩織が泣きながら帰ってきた。博子が驚いて聞き出したところによると、クラスの男の子に悪い奴がいて、詩織を貫われ子だと囃し立てたらしい。そのとき、博子は詩織を抱き締めて言ったという。

「詩織、泣くことないんだよ。お前はね、私の妹の子なんだから。だから、このうちに来たんだから。何も悪いことをしたわけじゃない。詩織はしっかり勉強をして、そんなばかなことをする子たちを見返してやりなさい。詩織はねえ、今のその、素直ないい子のままでいいんだよ」

博子は詩織をしっかり抱き締めたまま、涙が止まり気持ちが静まるまでそのままにいるのである。孝秋は後でその話を聞いて、女親にはかなわないなと思った。心の中でただ、ありがたかった。

浩二も詩織の力強い味方であった。学校の帰り道、子供たちに囲まれた中に詩織が泣いている。

「こら一、お前ら、女の子に何してる！ 女の子をいじめるんじゃない！」

浩二は華奢なつくりで、優しい子である。しかし、中学生の浩二は、小学生から見れば大きな大人と同じである。子供たちは慌てふためいて逃げていった。

それから浩二は、なるべく詩織のそばにいるようになった。一端の保護者のつもりであろう。そのうち、詩織自身の心根の優しさが次第に周りを打ち解けさせ、近所にも学校にも友達が増えていった。

心根の優しさだけではない。詩織は、人の心が読み取れる賢さを持っていた。人の心を和らげ、人間関係を円滑にしてしまう術を知っていた。そして、人を傷つけることを決してしなかった。賢い詩織は、宮崎の父母のことを一切話そうとはしなかったし、幼いころを懐かしんでいる様子を見せることなど全くなかった。しかし、一度だけ孝秋に生みの母を語ったことがある。詩織は普段から話し方も緩く、性格も鷹揚であった。詩織が中学生になったばかりのころ、孝秋が何気なく詩織に、「お前はおっとりしているね」と言ったときのことだ。

「宮崎の人って、皆私と同じよ。皆おっとりした話し方するし、のんびりしてるし。私、ここに来た初めのころはみんなの話についていけなかったもの」

「ああ、そうかい。お前の母親もそうだったかい？」

心の底にずっとある、詩織の母親ってどんな女性だったのかという思いから、つい聞いてしまったのだ。

父の思いがけない質問に一瞬戸惑いの色を見せたものの、詩織は頬を緩ませて静かに答えた。

「そうね。のんびりした人だった」

遠い目をしてそう言ったきり、口を噤んでしまった。もともとおっとりした子が、育ての母のてきぱきした性格についていくべく、きりきり舞いで気を使っていたのかもしれない。詩織は、物事をそつなく的確に捌いていける女性になっていった。ふと見せた、遠い目をした詩織。その心の中を垣間見た思いがして、孝秋は切なかった。

ともあれ、家族四人の平穏な日々が続いた。幸せな生活がそのまま永遠に続いていくことを、孝秋は疑いだにできなかった。

詩織を引き取ってから、八年の時が流れた。

立春を過ぎ梅の香りが漂うころ、アメリカに留学し、そのまま大学の講師にまでなっていた長男の修一が帰ってくることに決まった。若くして、千葉中央大学の助教授に迎えられるのだ。修一の研究テーマは医学の最先端に行くもので、世界から注目されていた。博子は修一の帰国を手放しで喜び、そのうろたえぶりは目を覆うばかりであった。

孝秋が日本病理学会のレセプションに列席していたときのことである。

「葉山教授！」

孝秋が突然の声に振り向くと、千葉中央大学の岡垣教授が笑顔で寄ってきた。

「岡垣です。この度、わが校にご子息をお迎えすることになりまして、大変ありがたく思っております」

「ああ、こちらこそ。お世話になります。何分まだ若輩者ですので、なにとぞよろしく願います」

「いやいや、あちらでももう実績を挙げておられますので、私共も心強い限りです。ところで、実は滝沢教授から頼まれ事がありまして」

「滝沢教授と申されますと、あの循環器疾患の研究で有名な……」

「そうです。実は滝沢教授には、二十九歳になられるお嬢様がおられまして、是非とも修一君のお相手にと」

「はあ？」

滝沢教授は、千葉中央大学で権威のある医学部を率いる部長であった。そういえば、修一からの手紙に、アメリカでの学会で面識を得て、いろいろお世話になったとあったのを思い出した。

「滝沢教授は修一君のことを非常に買っておられまして、必ずや私の後を引き継いでくれる優れた人材だとおっしゃっておられます。お嬢様の佐和子様は私も会ったことがありますが、賢く優しい女性です。私に仲人になってくれと滝沢教授はすっかりその気で、全く気が早い。はっはっは。お写真まで預かってきておりまして、こんな所でなんです」

岡垣教授は、手にしていた封筒を孝秋に押し付けるように手渡した。

「また改めて奥様にもご挨拶にお伺いしますが、とりあえずよろしく」

孝秋は家に帰ると早速、岡垣教授から預かった滝沢教授の娘の写真を博子に見せた。

「あまりに突然な話でびっくりしたよ」

「まあ、いいお話じゃないの。修一だって、もう三十二歳ですもの。いいかげん身を固めないと

」

修一は結婚するのは日本の女性と、と考えているらしく、今までその機会もないまま忙しさにかまけていたのだ。博子は写真を食い入るように見て言った。

「なかなかきれいで優しそうなお嬢様じゃないの。帰ってきたら、早速会わせてあげましょうよ」

「お前も気が早いな。まだまだ先のことだよ。まず、大学になじんで落ち着かないと」

「そうね。でも、楽しみが増えたわ。どんなお嬢様か、早く会ってみたいわ。あちらさまにも修一の写真とか履歴書とか、お渡ししたほうがいいんじゃないの」

「お前に任すよ」

「もう、あなたったら」

口をすぼめてそう言いながらも、博子は機嫌よく顔を綻ばせた。

修一の帰国が決まって、何やら葉山家は慌ただしくなった。詩織は既に十八歳になっていて、子供が好きで、保育科に通う短大生であった。浩二は春には大学を卒業する予定で、就職も決まった。

修一を迎えるため、母はお祝いの料理の献立や部屋の模様替えなどに余念がない。そんな母を手伝って、詩織もまた不安と期待を膨らませていた。

(どんなお兄さんなんだろう。浩二兄さんとは似ていないという話だけれど、私を妹として受け入れてくれるのだろうか。うまく行かなかったらどうしよう)

梅の季節が終わり、桜の開花が待たれる春まだ浅い日、修一が帰ってきた。父と浩二が飛行場まで迎えに行った。準備万端整えて、詩織は母と家で待った。母は立ったり座ったり落ち着かない。玄関のドアが開き、騒々しく男たちの声がした。

「お帰りなさい。まあ、修一、元気そうで。ああ、よかった。早く入って、さあさあ」

母の大仰なほどの喜びの陰に、詩織はそっと佇んでいた。その詩織の前に修一が姿を現した。意外と逞しく、父に似た顔立ちで切れ長の目が涼しげである。修一と詩織の目と目が合った。一瞬、時間が止まった。今までのすべてがこの時のためにあったような、懐かしい人に会えたような、不思議な瞬間であった。

どよどよと父と浩二が入ってきて、詩織も修一も押されるような形で居間に座った。テーブルにはご馳走がひしめいている。

「浩二、兄さんの荷物を部屋に持って行ってちょうだい。修一、着替えが部屋に置いてあるから、着替えていらっしやい」

そうして、久しぶりの家族が揃って宴会が始まった。その中で、詩織は自分だけ場違いなような、落ち着かない気分であった。しばらくして、孝秋が今更のように気が付いたという顔をして、詩織を振り返った。

「ああ、そうだ。修一は実際に会うのは初めてなんだな。この子が詩織だよ。お前の妹だ。あんまりきれいな妹で、びっくりしたろう」

冗談っぽく言って、大声で笑った。母に負けず劣らず、父もかなりの興奮状態なのである。

「ああ、びっくりしたよ。こんな美人に成長していたなんてねえ。早く帰ってくればよかったよ

」

「お前、美人なだけじゃないぞ。心もきれいで優しくて、最高の妹だぞ」

もう、既に父は酔っているかのようである。普段無口な父が、何と饒舌なことだろう。詩織は頬を赤らめてうつむいた。賑やかな宴会は延々と続き、笑い声はいつまでも葉山家にこだました

。

浩二にはこのところ憂鬱な日々が続いていた。兄の修一が帰ってきてから、詩織の様子が何か今までとは違うのを感じるのだ。詩織と自分とはとても仲の良い兄妹だった。彼女は自分に全幅の信頼を寄せてくれたはずだし、自分も格別の愛情を注いだ。その詩織が何かよそよそしい。何があったわけでもない。自分の思い過ごしかもしれない。しかし、確かに今、詩織の意識は修一のほうに向いている。

浩二は自分自身、詩織に対する気持ちは兄妹のそれとしか思っていなかった。ところが修一が帰ってきてから、自分の気持ちに疑問を感じ始めていた。これはもしかして恋愛感情なのか。愕然とする思いであった。それと同時に後悔した。兄が帰る前に、詩織の心を掴んでおくべきだった。

(ああ、自分はなんてのろまなお人よしだったんだ)

その浩二の不安は杞憂には終わらなかった。思いも寄らないところでただならぬ様子の二人を見掛けてしまったのだ。浩二は会社の新人研修で、湘南の研修所に来ていた。ここでは講義ばかりではなく、体力をつけるためにと、早朝から海岸を走らされた。二週間の研修が終わり、最後の日曜日、泳いだりボートで漕ぎ出したり自由時間を楽しんだ。

その帰りであった。バスは東名高速を走っていた。川崎のパーキングでトイレ休憩のときである。見覚えのある車だと思った。果たして兄の車に違いなかった。中に人は乗っていない。心を残しながらバスに乗り込んだ。発車するそのとき、窓の向こうに、ぴったりと寄り添い、いかにも仲良さそうに歩く兄と詩織の姿があった。兄が詩織の肩に手をかけ、車に乗り込ませた。そのときの、修一を見上げる詩織の表情に浩二は息を呑んだ。初めて見る、詩織の、たぶん特別な男だけに見せる女の表情であろう。あれは兄妹ではない、恋人同士の姿という以外言いようがない。浩二の衝撃は大きかった。

バスに揺られながら、浩二は詩織が家に来たときのことから、その後のいろいろなことを思い出していた。かわいかった詩織。すぐに二人は打ち解けて、浩二は学校から帰っては詩織といろんな遊びをしてやった。あれから八年、いや九年になるのだろうか。詩織は、時折色気を感じさせる年齢になった。お風呂上りの素顔など、はっとさせられることも多かった。しかし、二人は兄妹以上ではなかった。踏み越えてしまえばよかったんだと、歯軋りする思いである。

(自分は小さいころから、兄にはかなわなかった。学校の成績も、体格もすべて。母だって兄への愛情や期待ほど自分には掛けてくれなかった。父なんて端から相手にしてくれなかった)

その兄がアメリカに留学してほっとした。これで父や母を独り占めできる。詩織が家に来てからなんと楽しい家庭だったろう。外の冷たい風当たりのせいで、尚更家族は固く結束した。兄が帰ってこなければ、あのまま幸せな家族だったのに。

家に帰ってからも、二人は何食わぬ顔でいる。浩二はやりきれない思いである。いっそ、問い詰めてやろうかと思う。しかし、それでは詩織がかわいそうだとも思う。どこまでもお人よしであった。何も言えないまま、月日は流れた。

長期の出張から帰った浩二を、詩織が屈託のない笑顔で出迎えた。

「あら、浩二兄さん、早かったのね。お帰りなさい」

浩二の仕事は出張が多く、家にいないことが多くなった。それと反対に修一は毎日家と大学の往復で、詩織という時間は修一のほうが長いのであった。

「ああ、なんだか久しぶりだね。元気かい」

「うん、元気よ。お兄さんも元気？」

「学校はどんな？ 来年、卒業だね。どんなところに就職するの？」

「ううん、まだ分からない。というか、就職どうしようかなと思って」

「えっ、就職しないの？」

「お花とかお茶とか習って、花嫁修業したほうがいいかなとも思ってね」

「へえ、もう結婚でも考えてるの？」

「ええっ、いやあそんなこと……」

詩織の頬が赤く染まった。確かに何かある。心の底に押し込めていた疑惑がまた顔を出した。

その夜、久しぶりに五人の家族が揃って食事をした。浩二はちらちらと修一と詩織の様子を盗み見た。詩織の眼差しが修一に向けられるとき、そこには浩二に対するときとは違う何かがあった。浩二の疑惑は確信に変わった。

明るる日、浩二は会社から大学に電話して、兄の修一を話があると呼び出した。浩二も前に行ったことのあるスナックで修一は待っていた。ヘビースモーカーの修一の前には、たばこの吸殻で一杯になった硝子の灰皿があった。

「何だよ、急に。何の話だい？」

修一は新しいたばこに火を点け、口にくわえたまま言った。

「兄さん、はっきり聞くけど、詩織とはどうなんだ？」

つい語気が強くなってしまった浩二に、修一は口から落としそうになったたばこを慌てて手に取って、驚いた目を向けた。

「どうなんだって。どうならいいんだ」

「兄さん、もしかして詩織に手を出してやしないだろうな」

修一はさすがにむっとした顔をした。そこまで率直な聞き方をされるとは思っていなかったのだろう。

「お前、嫌な言い方をするんだな。それなら言うが、僕は詩織と結婚するつもりでいるさ」

ほぼ予想していた答えであった。それでもショックは隠しきれない。

「兄さん、僕たち兄妹じゃないのかい？ 何だよ、突然帰ってきて、そんな勝手な……」

浩二は怒りと情けなさで震える声で言った。

「兄妹って言ったって、血の繋がりはないんだから。僕は彼女を幸せにするさ。任せとけよ」

「兄さんなんか帰ってこなくてよかったよ。僕たちだけで十分幸せだったよ」

「あっはっは。何だ、お前。もしかして妬いてるのか？ まさかお前。えっ、お前、詩織を好きなんじゃ……」

修一は笑いながら、からかうような目付きで浩二を覗き込んだ。

「いい加減にしてよ、兄さん。僕たちは詩織がまだ小さいころから仲のいい兄妹なんだ。だから、詩織が幸せになってほしい気持ちは人一倍あるし、それを見届ける権利はあるさ」

「お前、回りくどい言い方するなよ。お前の気持ちは分からなくもないが、詩織の気持ちははっきりしてるぞ。詩織と僕は愛し合ってるんだ。真剣にな。詩織を幸せにできる人間は僕しかいないさ」

修一は自信たっぷりに言って、たばこをうまそうに吸い込み、その煙を空中にゆっくりと吐き出した。完全に浩二は修一に呑まれていた。薄暗い中をゆらゆらと流れていく白い煙をぼんやりと目で追いながら、もう一言もなかった。

浩二は荷物を纏めていた。飛行機に乗る時間が近づいている。母が部屋を覗いた。

「荷物できた？」

何も知らない母は落ち着かない様子で、さっきからそわそわと居間と浩二の部屋を行ったり来たりしている。浩二は、尼崎の工場にある研究所に自らの希望で行くことになったのである。一度も手を離れたことのなかった浩二が遠い所に行ってしまう。大丈夫なのだろうか、と母は心配でたまらないのだろう。その母には浩二自身の希望でとは言っていない。

浩二は玄関に荷物を持って出た。詩織が明るい眼差しで浩二を見上げ、邪気なく言った。

「今度いつ帰ってくるの？」

「分からない。来年の正月には帰るだろうけど」

詩織をちらりと見て、すぐに目を逸らし背を向けた。辛そうな顔を見られたくない。詩織の肩越しに、修一が無言で立っているのが目の隅に見えた。一言も交わさぬままであった。父が空港まで送ってくれた。

「元気でな。何かあったら帰ってきていいぞ」

「お父さん、甘いな」

「そうかな」

父は寂しそうに笑った。

詩織は幸せの絶頂にいた。父母の目を盗んで、修一とデートをした。週末、それぞれの友達と遊びに行くと見せかけて、途中で落ち合っているいろいろな所に行った。信州、鎌倉、京都……。景色のよいリゾートホテルに二人は泊まった。

ここは紅葉の美しい箱根のホテルである。カーテンから漏れる朝日に目覚めた詩織は、快いけだるさを感じた。

（ああ、昨夜はなんとすばらしかったろう）

そっと横にいる修一の寝顔を見つめた。自分は愛されているとつくづく実感する。

（私の今までの人生は、すべてこの人に出会うためのものだったんだ）

詩織は、自分が母の妹の子ではないと見抜いていた。あれは、いじめられて泣いて帰ってきた詩織を慰めるための、とっさの嘘に違いなかった。父も母に話を合わせていたが、内緒で調べたところによると、自分の生家の三浦家と葉山家、そして母の実家とも何の関係もなかった。親戚筋でも何でもないのだ。それなのに、なぜ自分をわざわざ遠く宮崎まで迎えに来て引き取ったのか。そういえば、父は昔その三浦の祖父に世話になったとも聞いたことがある。父の自分に対する細かい心遣いを思うと、その話を信じる以外ないではないか。

詩織は父と母に心から感謝した。そうして、自分がこの修一と幸せになることで恩返しができるのだと思っていた。いつか、修一と二人、父と母を前にして結婚の話をするようになるだろう。二人の、驚き喜ぶ顔が浮かぶ。そして、二人に孫を抱かせる日が来るだろう。詩織の将来の設計は、輝かしく出来上がっていた。

「あ、お兄さん、目が覚めた？」

修一はうつ伏せになり、枕元に灰皿を引き寄せてたばこに火を点けた。いかにもうまそうにたばこをくゆらせて、目を細めて詩織を見やって言った。

「ふふん、詩織。もうそろそろ、そのお兄さんって言うの止めないかい」

「そうね。でも何と呼べばいいの？ 修一さん？ それとも、あなた？」

「ああ、そのあなたがいいな」

「ふふ。でもさ、家でひよこつと、あなた、なんて出たら大変よ」

「ははは、そうだね。でも、もう家族に発表する時期かもしれないな」

「ほんと？ 嬉しい。でもお兄さん、教授の娘さんのことは？」

修一はぎくつとした顔を向けた。

「えっ、詩織、知ってたのか」

「だって、お父さんもお母さんもいつもやきもきして話してるもの。修一は一体どう思っているんだって。話を早く纏めなきゃって」

「勝手なこと言ってるよ。僕には関係ない話さ」

修一は切って捨てるような言い方をして、たばこの火を灰皿でもみ消した。

「でも、お兄さんの将来のためには、いい話なんじゃないの？」

詩織は修一の腕の下に潜り込み、筋肉質の胸にすーと指を這わせながら、いたずらっぽく睨むような目で見上げた。

「愛のない結婚なんて、ナンセンスだよ。自分の将来は実力で勝ち取るさ」

「すてき。嬉しいわ。あ、な、た」

甘えた声でささやくように言って、詩織は幸せいっぱい顔を修一の厚い胸に埋めた。

孝秋は苛立たしい思いが募っていた。岡垣教授の仲立ちで、修一と滝沢教授の娘との見合いはとうに済ませている。修一は何を考えているのか、はっきりした返事をしない。岡垣教授からは、事あるごとにせつつかれている。教授も娘も異論なく、色よい返事を待っているのだという。しかし、孝秋には煮え切らない返事しかできない。そろそろ修一を問い詰めてみるかと考えていた。

孝秋が一人遅い夕食を終え、居間でくつろいでいると、修一と詩織が何やら緊張した気配で入ってきた。

「何だ、二人そろって」

二人の顔を見たとき、妙に嫌な予感がした。孝秋の心の底に、自分では認めたくない何か、恐れていた何かがいきなり頭をもたげた。

「ああ、お父さんとお母さんに話があるんだ。実は、僕たち結婚したいと思って」

「ええっ、あなたたち、いつからそんなだったの？ まあ、気が付かなかった。でもお父さん、この子たちならきっと幸せになるわね」

博子は驚いた表情から喜びの表情に変わり、見開いた目はまんざらでもない様子である。
(とんでもない)

孝秋のほうは色を失い、顔を苦渋に歪ませた。

「ばかな、結婚なんてできないぞ。おまえたちは兄妹なんだ。結婚なんて、許さん！」

我知らず大声を上げてしまった。三人が三人、驚愕の目を向けた。

「何で？ あなた、この二人は血は繋がっていないんだから結婚したっていいじゃない……」

「い、いかん。絶対にいかん。きよ、きょうだいなんだから。み、見合いの話もあるし」

孝秋は冷静さを失い真っ青な顔で、どもりうろたえながら繰り返す。

「あなた、もしかしてこの子たちほんとの……？ 詩織は、詩織は、あなた……」

孝秋は返答の仕様がな。孝秋と詩織は父と子に間違いなく、修一と詩織は確かに兄妹なのだ。しかし、言えない。

「と、とにかく、結婚は許さん」

声が掠れた。断固、結婚だけは阻止せねば。でなければ、大変なことになる。焦りながら、かたくなにそう思った。額には脂汗がにじむ。

「めちやくちゃだな、お父さん。ちゃんと説明してくれよ。何でだめなんだ」

驚きと苛立ちを抑えてはいるものの、厳しい口調で修一が言った。

「いいえ、もういい。分かったわ」

詩織が目には涙をいっぱいため、口から嗚咽が漏れそうになるのを必死に押さえ、一言そう言って席を立った。部屋を出て行く詩織の後を修一が追った。二人残されて、気まずい空気が漂った。

「あなた、本当のことを言って。詩織はあなたの子なのね。そうなのね。三浦さんの奥さんとあなたの子なのね」

「……」

孝秋は頭が混乱していた。そうとも言えるし、違うとも言える。生物学的には確かに詩織は自分の子に違いない。しかし、自分は詩織の母を知らない。孝秋の沈黙をどう解釈したのか、博子はパイと部屋を出て行った。

茫然と一人居間に座ったまま、孝秋は焦って考えを纏めようとした。家族四人、それぞれがそれぞれの衝撃を受けた。そして今、家族の絆にめりめりと音を立てて亀裂が入ったように思う。それをどう修復すればよいのか……。

博子は、詩織が三浦さんの奥さんとの関係でできた子だと勘違いした。九年前、密かな疑いもあっただろうが、博子は自分を信じ、詩織をここまで育て上げてくれた。その博子が今、自分は九年間夫に騙され続けてきたのかと、深く傷ついているのだろう。その誤解は解いてやりたかった。

(よし、博子には本当のことを話さねば)

修一は何のことだか分かっていないだろう。とにかく結婚を頭から反対された。なぜだか分からないまま、大きな衝撃を受けただろう。しかし、結婚しようと思った相手が血を分けた妹だということははっきり言わねばならない。かわいそうだが仕方がない。生物学的には、事実なのだから。修一は自分と同じ医学者だ。本当のことを話しても、きっと理解するだろう。理解したところで、何の解決にもならないが、修一には話すべきだと結論した。

問題は詩織であった。彼女には絶対に本当のことは言えない。お前は試験管ベビーだなどどうして言えよう。心優しい、繊細な神経の持ち主の詩織をこれ以上傷つけることはできない。愛する人との結婚を反対されただけでもショックであっただろう。勘のよい詩織のことだ。その理由を、育ての父が実は生みの母と不倫をし、自分はそれでできた子だったからかと受け取り、今その衝撃に震えているに違いない。しかし、真実を話してその誤解を解いても、新たな衝撃のほうが大きいだろう。詩織には、真実は何があろうと聞かせられない。

(とにかく、博子に話すことにしよう)

孝秋は重い腰を上げた。

中は暗かった。窓の外の月明かりで、博子がベッドに座っているのが仄見えた。孝秋が部屋の明かりを点けた。真っ赤に泣き腫らした目を眩しそうに孝秋に向けたが、直ぐにそっぽを向いた。

「博子、お前は誤解してるんだ。本当のことを話すから、よく聞いてくれ」

孝秋もベッドに腰を下ろして話し始めた。博子は黙って聞いていた。孝秋が話し終わっても黙ったまま、びくとも動かない。重い沈黙が流れた。しばらくして、博子がポツンと言った。

「みんなかわいそう、みんな」

次の朝、孝秋が詩織の部屋をそっと覗くと詩織はまだベッドの中にいた。ぐっすり寝込んでいるようだ。昨晚はきつと眠れなかったに違いない。かわいそうにと心が痛んだ。全く迂闊であった。幼いころから兄妹となった浩二と詩織と、そして修一と詩織とは違うことを心得ておくべ

きであった。年頃の男と女が本当の兄妹とは知らずに出会って、同じ屋根の下に住む。何も起こることはないと言えないはずである。修一は既に社会的地位もあり、詩織とは一回り以上も年が離れている。まさかと思っていた。あまりに無用心であった。孝秋は、己の迂闊さを悔やんでも悔やみきれない思いであった。詩織の痛ましが胸に迫る。音がしないようにそっとドアを閉めて、ため息をついた。

孝秋は沈痛な気持ちを奮い立たせるように背筋を伸ばして、修一の部屋の前に立った。軽くノックをして、そっとドアを開く。

「修一、起きてるか。話があるんだ。書斎に来てくれないか」

修一は、腫れぼったい目で父を見やって頷いた。

「詩織の様子はどうだった」

「ああ、泣きじゃくってショック状態だったよ。明け方にやっと寝付いたんだ」

「そうか、かわいそうなことをした」

「お父さん、どういうことなのか、話を聞かせてよ」

覚悟はしているといった様子で、修一は言った。孝秋は、すべてを話した。修一の表情が見る見る変わっていった。顔面は蒼白となり、手が細かに震え出した。孝秋は話すうち、修一の異変に気付いた。予想とは全く違う反応であった。自分と同じ医学者の修一は、冷静に受け止めてくれるはずだという自分勝手な甘えがあった。もちろんショックは受けるだろう。本当の兄妹で愛し合ったということもショックだろうが、隠し子であるよりいいだろう。父として、不倫という不名誉な誤解は解いておきたい。それは単なる父親のエゴであった。しかし、結婚できないことの何がこれほどまでに修一に衝撃を与えたのだろうか。その様子はあまりにも異常だった。

「お父さん、何で早く話してくれなかったんだ」

修一はわなわたと震えながら、低く暗い振り絞るような声で言った。

「お父さん、遅かったよ」

新たな不安が孝秋の胸の内に生まれ、大きく広がった。

「何だ、何が遅かったんだ」

修一は苦しそうに顔を歪め、なかなか言葉が出ない。孝秋は焦燥感に駆られ、もどかしそうに叫んだ。

「修一、いったい何が遅かったんだ」

「……詩織のおなかには、もう子供が……」

「えっ、今何て言った？」

「子供が、くっ、くうー」

修一は首をがっくりとうなだれ、手を畳に付けて、肩を震わせて泣いた。その姿を、孝秋はぼんやりと見つめた。頭の中で、何かがかがらがらと音を立てて崩れるのを聞いた気がした。

(遅かった。何ということだ。血の繋がった兄妹で、子供を作ってしまった。近親相姦。許されない子……。ああ、何と情けない。しかし、その種を蒔いたのは、だれだろう、自分なんだ)

父の時代から医学者の家としての葉山家が、今まで築き上げてきた社会的地位や名誉。そしてそれは、修一へと受け継がれていく栄光の道のはずであった。そのためにこそ、教授の娘との縁

談を進めていたのではないか。何もかもすべてが足元から崩壊し、無残に潰えそうな恐怖感に孝秋はただ慄くばかりであった。

詩織は光のまばゆさを感じて目が覚めた。

(今、何時なんだろう)

時計に手を伸ばしたとき、きりりと頭痛が走った。昨夜の出来事が鮮明に思い出された。このまま目が覚めなければよかったのに、と思った。

(私はお父さんの本当の子だったのか。お兄さんとは、本当の兄妹だったのか。ああ、何ということだろう)

おなかに手が行った。この中に兄との子が宿っている。

(私は不義の子で、私と兄は近親相姦をして、法的にも人道的にも許されない子を作ってしまった)

閉じた目尻からつうーと涙がこぼれて、枕にしみ入った。そのとき、ドアが静かに開かれた。

「ああ、詩織。目が覚めたかい？」

修一が入ってきた。

「どう、気分は？」

「最悪だわ」

泣き笑いの顔で、詩織は答えた。修一も静かに笑ってみせて、「僕もだよ」と言った。ベッド際に座って、修一は詩織の髪を優しくなでた。

「つらい思いをしたね」

詩織は目を瞑り、されるがままでいた。

ふと不安な思いになって大きく目を見開き、詩織は探るように修一を見つめた。

「お兄さん、私たちは結婚をしちゃいけないのよね。じゃあ、この子はどうなるの？」

「……」

無言の修一の目の中に何か冷たいものがあるのに気付いて、詩織はいたたまれない気持ちで叫んだ。

「お兄さん、私嫌よ。私、この子産むわ。絶対に産むわ」

「詩織……」

修一が詩織を落ち着かせようと手を伸ばした。

「嫌！ 触らないで、あっちに行つて」

詩織はその手を払いのけて背中を向け、おなかの子を守るように丸く体を縮めた。投げかける言葉もなく立ち尽くしているのであろう修一の視線を、痛いほど背中に感じた。詩織は自分の心が固く閉じてしまったなと思った。

不幸の種

博子は昨夜から胃がずきずきと痛んだ。夫からすべてを聞かされて、どうしたらいいものかと、ただ思い悩むばかりなのである。あれから詩織は、一人かたくなに身を守るようなそぶりを見せて、絶対に中絶などしないと言外に示しているようだ。やっと二十歳になるかならないかの年齢で、かわいそうに思ってしまう。考えれば胃が痛むし、考えまいとするのだが、いつの間にかやはり考え込んでいる。もしかして子供に異常が現れる恐れがあるのではないかと思うし、だからと言って、嫌がるものを無理やりに中絶させることもできまい。

(ああ、一体どうすればいいのだろうか)

重い吐息をついて、買い物に行かなくてはと立ち上がったとたん、ぐるんと世界がひっくりかえって、何もかもが真っ暗になった。

遠くから「お母さん」と呼ぶ声がした。気が付くと、詩織の心配そうな顔があった。

「ああ、お母さん。気が付いた？ よかった。大丈夫？」

下に座布団が押し込まれ、上には毛布が掛けられている。

「ああ、私、どうしたんだろう」

「何かどさっと大きな音がしたから、びっくりして……。そしたら、お母さんが倒れてたのよ」

「まあ、そう……」

「お兄さんも、お父さんもまだ帰ってこないだろうから、タクシー呼んで病院に行こうか。それとも、近所のお医者さんに来てもらおうか？」

「ああ、大丈夫よ。少し横になってれば」

「そう……。お母さん、買い物に行こうとしてたんでしょ。私、何かありあわせのもので作っちゃうから、休んでね」

「うん、ありがとう」

優しく言って台所に立つ詩織の姿を、ソファに横になって見送りながら、本当にいい子だと思う。母親にとって、女の子は男の子と違う頼もしさがある。今までも具合が悪いときなど、助けてくれるのは詩織だった。男なんて何の役にも立たない。風邪を引いたときには、氷枕を作ってくれたり、お粥を作ってくれたり、かいがいしくしてくれる。見様見真似の母の真似事だったろう。生来の優しさからかもしれないし、貰われてきた子の必死の気遣いかもしれない。なかった。

(この子が来てくれて、ほんとに私たちは幸せだったじゃないか。この子を幸せにしてあげたい。望むようにしてあげたい)

目に涙をにじませながら、博子は堂々巡りの思いをまた繰り返す。修一の話によると、詩織は子供を産むと言い張っているらしい。

(しかし、障害児が生まれたりすれば大変なことだ。夫はそんなことはないだろうと言うが、万が一ということもある。それに、二人を結婚させるわけにはいかないのに、誰の子として育てればいいのだろうか。何とか産ませないようにできないものか。その子がまた、不幸の種を背負ってきそうな気がする)

(あの人があんなことさえしなければ……。詩織を引き取りさえしなければ……。平穏な家族だったのに)

さっきまで詩織がいてくれてよかったと思っていたのに、もう引き取らなければよかったと思う。博子の頭は錯乱しそうであった。

(あの子だって、不幸になるために生まれてきたようなものじゃないか。何より、あの人が一番悪いんだ。私に何の相談もなく、大事な精子を勝手に……。不倫と同じことだわ)

夫に対する憎悪みたいなものが、乱れた思考回路をさらにかき回した。横になっているのに、ぐらりと目が眩む。朦朧としてくる。

(罰が当たったんだ、罰が……。神様の罰が。ああ、このまま地獄に引きずり込まれるのかもしれない)

遠くなる意識の中で、博子は思った。

病院で検査の結果、胃潰瘍と判明した。胃に穴が開いて出血し、ひどい貧血を起こしていたのだ。入院して、手術と決まった。心痛が博子の体を蝕んでしまったのか。博子の代わりに、家事一切を詩織が取り仕切った。子供をどうするか結論が付かないまま……。というよりも、博子も誰も皆、その事実を目を瞑れば逃れられるかのように、ただ無意味に避けていたに過ぎなかった。

研究室の机の上に、助手が作り上げた実験結果の書類を広げ、修一は慔然たる面持ちで一点を見つめたまま動かない。机の前に座ってどのくらい時間が経っただろう。日本循環器学会での発表の日にちが迫っている。この実験結果を元に論文を纏め上げなければならない。徹夜をしても間に合わない仕事であった。

修一は、絶望的な無力感に叩きのめされていた。あれ以来、詩織は自分に心を閉ざしてしまったように思う。周りの人間すべてが、子供を奪おうとするものかと思っているかのようなのだ。詩織が血の繋がった妹と知っていれば、こんなことにはならなかった。とすると、一体恋愛とは何なんだと思う。運命の出会いと思い、一生添い遂げたいと思い、愛し愛され……。一時の気の迷いか、単なる熱病か。

いや、血の繋がった妹というだけではない。何と試験管ベビー、今で言う体外受精児だったとは。非配偶者間体外受精、人間の力で無理やり出生させた子供なのだ。修一は医学者ではあるけれど、医学が万全だとは思っていない。逆に学問を究明しようとするほど、人間の力の及ばない偉大な力を感じるのだ。それは神と呼ばれるものかもしれない。修一は信仰はしていないが、人間は人間の限界を弁えるべきだという考えがあった。遺伝子操作、クローン、先端技術など、医学が進歩すればするほど、このまま人類は進んでいっていいのかと疑問が湧く。神の領域を既に侵しているという不安な思いがあった。

学問はすべて、人間がより幸福になるべく進歩するべきなのである。しかし、人間の出生という神聖な次元に、恐れを知らない人間が手を出した。人間の四苦と言われる生・老・病・死。人間はそれと戦い、健康と不老と不死とそして次の世代を得ようとしてきた。それは自然の流れ、営みに反する行為ではなかったか。地球環境においても、自然破壊は甚だしく、このまま行けば地球は破滅するかもしれないではないか。それと同じように、生老病死という刃向かえない自然に対する愚かな抵抗が、いつか人間を破滅させないと誰が断言できよう。

それにしても、母が貧血で倒れてからの詩織は、まるで自分が一家の主婦であるかのように振舞っている。詩織は妊娠を理由に、修一にも父にも居間でたばこを吸うことを禁じた。自室で吸えと言うのである。おなかの子を誰も認めていないのに、皆産むべきではないと心の中で思っているのに……。それを承知の上で、しらっとした顔で言うのである。そのとき父は絶句し、しばらくぼうーとしていたが、ふと気が付いてあわててたばこの火を灰皿でもみ消した。次の日から、テーブルの上にもどこにも灰皿の姿はなくなった。

詩織に女のしたたかさを感じるのは自分だけであろうか。優しい顔の下に、不気味な悪魔が潜んでいたのではないか。子供は今のうちに何とかしなければならぬのに、詩織の毅然とした態度は修一さえも寄せ付けなかった。それは、詩織自身の運命に対する開き直りのようでもあった。ただ本能的にわが子を守ろうとするだけのものではなさそうな気がする。わが地位を確立させるためのものではないか。

詩織は最初から積極的に自分に接触してきた。彼女が愛したものは、自分ではなく安住でき得る地位であったのかもしれない。そんな彼女にしてやられたのじゃないか。そうして、修一はそんなことを考える自分自身に憤慨するのである。

(いやいや、詩織はそんな女じゃない。落ち着けば、きっと自分の愚かさに気が付くだろう。いや、気付いてもらわねば困る)

滝沢教授の娘との縁談は、ぬらりくらりとした態度で通してきたけれど、はっきり断ったわけではない。詩織とのことは外部には秘密裏にして、あの話を進めるのが得策と思えた。そのためには絶対に子供は生まれてきてはならない。

(もし子供を産めば、僕の将来はどうなる。隠し通せるはずはないし、僕の社会的地位は崩壊するだろう。何とか始末する方法はないものか。あの子は世に出てはいけない子だ。中絶をどこまでも拒否するのなら、薬を飲ませて流産させてでも、何とかして葬らねば……)

そこまで考えてきて、修一は自分の恐ろしい考えに驚愕した。勝手に人間が人間を出生させ、今度はまた勝手に人間が人間を葬り去ろうとしている。何と罪深いことだろう。修一は自己矛盾に心が引き裂かれていくのをどうすることもできず、ただ手をこまねいて壊れていく様を見つめるだけであった。

外は既に日は落ちた。秋の終わりはつるべ落としで、冬の気配がすぐそこまで忍び寄っていた。研究所の明かりも点けず、修一の指には火の点いたたばこが挟まれたままであった。部屋の中で動くものはたばこの煙と、時折崩れ落ちるたばこの灰だけである。いすの背に深くもたれた修一は、微動だにもせず無為に時は流れていった。

突発事故

電話のベルがけたたましく鳴った。まだ外は明け始めたばかりである。

「はい、葉山です。……えっ、な、何ですか？」

博子が受話器を持ったまま、身動きしない。目を大きく見開き、ひざががくがくと震え出した。

「どうした、博子」

孝秋が受話器を妻の手からもぎ取った。

「もしもし、替わりましたが、何でしょうか？」

「えっ！ あ、……そうですか。どこの病院ですか？ ……はい、分かりました。はい、すぐ行きますので」

早朝のただならぬ騒々しさに、しかめ面で起きてきた修一に向かって孝秋は早口に言った。

「浩二が、工場で事故に遭った。何かが爆発したらしい。救急車で運ばれたそうだが、かなりの重症だという。病院に今から行くから、母さんを頼むぞ」

修一は青白く憔悴しきった顔をわずかに動かすだけで無反応である。その虚ろさがふと気になったが、かまっている時間はない。急いで用意をせねばと気が焦る。そこへ、詩織が二階から降りてきた。

「何かあったんですか？」

孝秋は浩二のことを早口で話し、取り敢えず自分だけ病院に行き、向こうから電話を入れるからと説明した。シャツのボタンをかける手が震えるのがもどかしく、心はもう既に外に飛び出している。

「まあ、大丈夫なんですか？」

詩織は大きく目を見張って驚いて見せた。その表情やしぐさは、博子そっくりである。博子の入院の準備や家のことを頼んで、孝秋は家を後にした。

大阪に向かう飛行機の中で、孝秋は深いため息をついた。あまりに突発的な事故の知らせに、まだ心臓の動悸が治まらない。向こうに着いたら、何かの間違いで元気な浩二が目丸くして孝秋を見上げるのかもしれない。そうであつたらいいがと、恐らく虚しい期待をしてみる孝秋であつた。

それにしても、今朝の家族のそれぞれの表情はどうであろう。博子はげっそりと痩せ、黒々としていた髪の毛が急に白っぽくなった。病人の元気のなさは仕方がないとしても、修一の虚ろさが気になって仕様がな。学会の準備で毎晩のように徹夜の状態であるらしかったが、さぞ苦しかろうと胸が痛む。しかし、精彩を欠いたその表情には、精神の安定を損ねた何か危険なものを感じた。それに比べ、詩織の表情はどうであろう。いかにも驚いた様子を見せたものの、その目にはなぜか輝くものがあつた。それぞれが苦悩を抱えた中で、一人生き生きとしているではないか。そこに妙な違和感を覚えたのだ。何か不愉快なのであつた。自分がすべての鍵を握っているという思いなのか。その心底に葉山家の主婦だとの自信を強めてでもいるかのようだ。

その実、博子が病気で倒れてからというもの、詩織はてきぱきと母の代わりを立派にこなしていた。それまでに詩織は育ての母から、あらゆる女の仕事を伝授してもらっていた。料理に、裁

縫に、主婦としての家政学とも言えるものを、博子は詩織に教え込んでいたのである。博子と詩織には女同士の仲間意識のような絆が結ばれていた。そこには男には割り込めない、二人だけの何かがあった。博子の代わりに詩織は、今まで母から思い切り吸収してきたものを存分に発揮しているのだ。今や詩織は、育ての母の主婦の地位を乗っ取ったと言えるのかもしれない。うんざりする思いで、女は強いと孝秋はつぶやいた。いや、母は強しということか。詩織の変化は妊娠してからの変化に違いなかった。それにしても、浩二の事故の知らせに対して、今朝の詩織に痛みの表情が片鱗でも窺えただろうか。十歳のときから、あれほど仲の良かった兄妹なのに……。心が寒かった。孝秋の中に、今までの詩織に対するものとは全く違う感情が生まれていた。

工場地帯の中を、随分と走った。途中から時雨れて気温がぐんと冷え込んだ。やっとその白い建物が孝秋の視野に入った。県立尼崎病院である。更にその二キロ先に、浩二の働いていた工場があるという。時雨は止んだが、まるで日暮れてしまったかのようなどんよりとした曇り空である。待ち受けていた病院長が、孝秋の名を知っていたらしく、挨拶をして浩二のところに案内した。

集中治療室に入れられた浩二の身体から、無数の管が幾多の機器に繋がっているのが見える。動揺した表情で落ち着きなく立っていた男が孝秋に駆け寄った。その男は工場長だと名乗った。「大変な事になってしまって。申し訳ないことをしました」

そう言って、白髪交じりの工場長は手にした帽子をもみくしゃにした。そして、しどろもどろに言う。

「しかし、こんなことを言っただけでは何ですが。安全対策は万全のはずでして。正直言って、こんな事故を起こすなんてことは全く考えられませんでした。……」

工場長はくどくどしく、日頃から点検には細心の注意を払っていたこと。なぜトラブルが発生したか、いまだに分からない。現在調査中であるが、こんなことは初めて起きたのだと繰り返し言い続けた。

ガラスの小窓越しに、人工呼吸器の下の青白い顔が垣間見えた。

(浩二はもしかしたら、自殺を図ったのではないか)

ふとそう思った。根拠はない。全くただの事故かもしれない。ならば、浩二をそこまで不注意にさせたものは何だったのか。修一が帰ってから浩二の様子が変わった。そういえば、あのころから詩織は急に女らしくなった気がする。そして、浩二は無口になり、笑わなくなり、家から出て行った。それが、こんなことになろうとは。家を出るとき、断固反対し引き留めておけばよかった。幼いころから機械いじりが好きだった浩二とはあまり共通の話題はなく、男同士で話し合うということもなかった。

(もっと、浩二の心の中に踏み込んでやればよかった。もっと、浩二の思いを聞いてやってあげればよかった)

既に意味のない繰り返し言である。孝秋は、家の中が崩壊してしまったことを思い知った。その始まりは自分の、目にも見えない小さな小さな一匹の精虫であった。不妊治療に貢献するためという大義名分と、自分は優れた遺伝子の持ち主なんだという驕りで提供した。傲慢としか言いよう

がない。

人工授精、さらに体外受精という自然には起こりえないことを、医学は行ってきた。それは、子供のできない夫婦にとっては福音であったかもしれない。しかし、この医学の落とし子が、結局それに関わった葉山家の人々をすべて不幸に陥れたのではないか。精子バンクには、今もたくさんの精子が保存され、望まれて卵子との結合を果たし、これから先も多くの人工授精児、対外受精児を誕生させていくのだろう。自然に恵まれた子宝ではなく、生殖技術という人間の手による人間の出生は、幸せを伴わないものだったのだろうか。

わが家に起きた、このような悲惨なケースは稀かもしれない。しかし、どこにもその可能性はないとは言えまい。それにしても、詩織の両親さえ交通事故にあっていなければ……。たった一人、薄幸な少女を残して……。それがなければ、詩織は葉山家に引き取られることはなかったのだ。

(いや、どうであれ、自分が詩織を引き取らなければよかったのだ。知らぬ顔を通していればよかった。いや、元より精子の提供さえしなければ……)

今更どうにもならない後悔の念が、孝秋を押し潰した。すべての原因は自分が作ったのだ。孝秋は、前も後ろも切り立った崖に一人立たされている気がした。取り返しのつかない現実を突き付けられて、どうすることもできない。

(意識がこのまま戻らなかつたら……)

孝秋のあごが震え、歯が音を立てそうになる。その横で工場長がただおろおろと、孝秋の顔と治療室の中を交互に見回している。浩二の意識が戻るよう祈るよりほか、今の孝秋にできることはなかった。

孝秋は、博子の顔をじっと見つめていた。憔悴しきったわが妻の顔を。

ひどい貧血で倒れた博子は、胃潰瘍ということで手術が決まった。ところが、入院して手術前のいろいろな検査の結果、癌が発見されたのだ。それもかなり進んでいた。もともと我慢強い性格で、医学者の妻でありながら昔から医薬に頼ろうとしない彼女であった。

(私がついていながら、こんなことにしてしまった)

悔やんでも悔やみ切れない。良妻賢母というべき博子に、今までどれだけ助けられたことだろう。妻あってこそ自分があった。その大切な妻が、苦悩を抱え疲れ切った身を横たえている。

落ち窪んだ目が、ふと開いた。

「あら、あなた。来てたの？ えっ、今日はお休みだったっけ」

「ああ、目が覚めたかい。はは、今日は日曜日じゃないか」

「まあ、曜日も分からなくなっているわ」

「何も考えずゆっくりしていればいいさ」

博子が癌であることは告知されていない。主治医から相談を受けたが、胃潰瘍と思わせたままがいい、と孝秋は結論した。孝秋は、仕事を辞めて博子の介護に専念するつもりでいた。それが、せめてもの博子に対する償いであろう。

「あなた、浩二はだいぶいいかしら？」

「ああ、順調なようだよ」

浩二は幸いにも意識を取り戻し、奇跡的に助かった。頭の傷も大したことはなく、右大腿部の骨折も順調に治り、今ではリハビリを始めているという。

「早く良くなって帰ってきてほしいわね。元気な顔が見たいわ」

「ああ、もうすぐ帰ってくるよ」

博子は目をつぶり、何とも言えない慈愛のこもった笑顔を浮かべた。その笑顔が急に掻き曇る。

「修一と詩織はどうしてる？」

「うん、修一は学会も済んで、落ち着いたようだよ」

「学会、うまく行ったの？ 大変な時期だったから、大丈夫だったのかなって気になって……」

「何とかあったようだよ。詩織はつわりも終わって、元気だし」

「ああ、元気なのはいいけどねえ、あのまま産んじやうの」

「うーん、困ったものだが、どうしようもない。私が蒔いた種だ。私が責任取るから、おまえは何も心配するな」

「……」

博子はさも疲れたという表情で、再び目を閉じて沈黙した。博子は自分のことは何も言わない。どす黒くしわがれた唇をやつとのように動かして、子供たちのことだけを聞いた。

博子は胃全摘手術を受けた。既に、後腹膜のリンパ節や、膵臓、脾臓まで転移していて、それは目に見える限り摘出された。しかし、早い時期に再発の恐れがあるということであった。そ

の後、退院して家でゆっくり養生していたのだが、年末からしばしば下痢が止まらなくなった。おなかや背中痛みはひどく、体重が見る見る減少していった。正月を何とか越したものの病状は急速に進んで、一月半ば再入院となった。

その後、病状は悪化の一途をたどった。既にモルヒネが使われていた。孝秋には、あと二週間持つかどうかと伝えられた。癌性の貧血が進み、白血球も少なくなって、全身が衰弱していたのである。孝秋はほとんど付ききりであった。

「あなた。私のために、ごめんなさいね」

博子は何度も繰り返して言う。孝秋が、定年にはまだ間があったのに大学を辞めてしまったからだ。

「そんなこと、いいから」

「あなた、修一は？ 元気にしているかしら」

「大学のほうが忙しくてな。見舞いに来れなくて気にしているよ」

「元気にしていればいいのよ」

最初の手術後の退院で、家で寝たり起きたりで過ごしていたとき、修一の様子を博子は感じ取っていたに違いない。自分が病床にあってなお、修一のことばかりが心配なのであろう。

「浩二は？」

「ああ、もうそろそろ会社に行けるようだ」

リハビリで歩けるようになって、浩二は東京の病院に転院した。今はもう退院して、時々博子の様子を見に来ていた。勤めも東京本社勤務ということになった。もう浩二は心配ない。ただ一つ気掛かりなことがあった。浩二にも詩織が血の繋がった妹であることを言うておくべきではないか。機会を見つけて言わなければと、決意をした。体中の血液がまるで鉛に変わったかと思うほど、どろりと重い決意であった。

病院の帰り、足が家に向かなくて、孝秋は市民図書館に寄った。ぼんやりといすに座って、棚から取り出してきた本を意味もなく繰った。

修一の学会での評価は散々であったらしい。徹夜で準備をしていたとは言え、詩織のこと、浩二の事故、そして母の入院とあまりにもいろいろあり過ぎた。纏まりのつかないまま学会の当日を迎え、あの無表情な精彩のない顔で壇上に立った。会場には冷たい空気が流れ、ひそひそ話があちこちに起こった。修一は途中何度も絶句し、薄ら笑いを浮かべて引き下がった。滝沢教授からの電話に、孝秋も言葉を失った。

「いろいろあったことは分かります。気の毒だとも思います。しかし、あの薄ら笑いはよくない。誠意が感じられない。一所懸命やったという誠意さえ伝われば、研究成果が未完成でもまだよかったのです。私の期待は大きく裏切られました。残念です」

「……。何とも申し訳ありません」

「いやいや、あなたが謝られることではない。それよりも、私は少し心配しています。修一君は、もしかしてカウンセリングを受けたほうがいいのではないかと」

滝沢教授はそう言って、自分の知り合いだという精神科医を紹介した。同じ大学内ではまずか

ろうという心遣いであった。そして、今日修一にしばらく休むように言ったと、滝沢教授は辛そうに伝えた。孝秋がうすうす感じていたように、やはり修一の精神はどこか破綻を来たしているのかもしれない。

(順風満帆だった修一の人生を、私が狂わせてしまったのだ)

「すみません。そろそろ閉館ですが」

図書館の職員に声を掛けられて、孝秋はあわてて椅子から立ち上がった。膝の上に置いていた本を取り落としそうになって、さらに狼狽する孝秋を職員は妙な目を見た。孝秋は本を棚に戻すと、うつむいたまま急ぎ足で図書館を出た。

家に帰っても、今まで飛んで迎えてくれた妻はいない。居間で詩織が一人縫い物をしていた。

「浩二は？」

「部屋で休んでいらっしゃるようですよ」

「修一は？」

「部屋に閉じこもって出ていらっしゃらないんですよ」

詩織の口元に、ふっと嘲笑の色が浮かんだような気がした。手元には生まれてくる赤ちゃんのものであろう。かわいい動物柄の布地で何やら作っている。孝秋は苦々しげに顔を背けて、修一の部屋に向かった。

「修一、いるか？ 開けるぞ」

ドアを開けると、薄暗い部屋の中にぼつねんと座っている修一がいた。

「どうした？ 気分でも悪いのか？」

孝秋は明かりを点けて、務めて明るい声を掛けた。

「いいや、……」

やはり、表情はない。

「修一、滝沢教授から電話もらったよ。明日私も一緒に行くから、紹介してもらった先生の所に行ってみよう」

「うん……」

まるで、自分の意志というものをどこかに忘れてきたかのような修一。その虚ろな顔を見つめ、孝秋は目に涙があふれそうになった。あの精悍で輝く目をし、自信に溢れていた修一は、どこに行ったのだろう。どんよりと曇った瞳に光はない。今まであまりにも順調な人生であった。将来は輝かしく開かれていた。それが突然の大きな挫折を味わって、その神経は持ちこたえられなかったのだろうか。修一の哀れな姿は、孝秋をも押し潰した。

そのとき、だらしなくボタンを外したシャツの袖口に、孝秋の視線が釘付けになった。

「しゅ、修一、お前、その手はどうした」

修一の手首が無数の切り傷で覆われている。白いシャツの袖口が、血で赤黒く汚れていた。

「ああ、……もう死んでしまいたい……」

ぼそぼそとつぶやくように言う修一の腕を取って、孝秋は途方に暮れた。

幼き日の記憶

母の博子が詩織に会いたいと言っているという。詩織は孝秋に頼まれた下着の着替えを紙袋に詰め、病院に向かった。母の介護は父に任せきりで、自分も顔を出さなければとは思っているものの、学校と家事、そして出産の準備と、なかなか忙しかった。

(一体何の話だろう。遺言でもあるのかしらん)

母の容体はすべて孝秋から聞いていた。後、いくばくもない命だということも。

(でも、なぜ私なんだろう。修一兄さんは全く行っていないのに)

修一のごことは、堅く口止めされている。既に修一は入院してしまった。

(お兄さんのことを追求されたらどうしよう)

孝秋からは、アメリカの学会から招待されて、その準備で忙しいんだとでも言うよう入れ知恵されていた。しかし、それにしても一度も顔を出さない息子に疑問を感じないほうがおかしい。きっと母は感づいているに違いない、と詩織は思った。

(何度来ても、病院って迷路みたいで分からない)

詩織はキョロキョロと周りを見回しながら、やっと母の病室にたどり着いた。そっとノックをして、ドアを開ける。母が力ない笑顔を見せた。

「お母さん、ごめんね。何かと忙しくって」

「ううん。あなたのお陰で、家の心配をしなくて済んで助かってるわ。ありがとうね」

詩織は庭に咲いていた花を花瓶に入れ、窓際の台の上に置いた。

「まあ、きれいね。ありがとう」

「具合どう？」

「うん、何だかね。時々痛みがひどくってね」

「そう、どこが痛むの？」

「お腹と、背中がね」

「さすってあげようか」

背中を向けた母を詩織は優しくなでた。肉がげっそり落ちてしまった細い身体。その痛々しさに詩織の胸が潰れた。昔から、いつも澆刺と一分の隙も見せず、凜とした母であった。詩織は恐れさえ以って尊敬した。家から外に出ない日でも、朝から化粧をし、常に身だしなみを忘れない美しい母であった。

その母が今、顔も体も肉が削げ落ち、弱々しく横たわっている。髪の毛は多く抜け落ちて地肌が透けていた。

そのとき、急に母がうなり声を上げた。

「うー、痛い！」

「お母さん、大丈夫。お母さん！」

詩織はあわてて、ナースコールのボタンを押した。看護婦が飛んできて様子を見るや、また飛び出していった。入れ替わりに担当医が駆けつけて、静脈に注射器の針を射した。苦しみがいた母が、急に力尽きたように動かなくなった。

「これでしばらく大丈夫です」

そう言って、医者も看護婦も出て行った。

一人取り残されて、詩織は全身の緊張が萎えて椅子に座り込んだ。骸骨のような母の顔をじっと見つめた。こうして、苦しみながら死んでいくのだろうか。

その顔を見つめているうち、詩織は亡くなった宮崎の父母のことを思い出していた。あれはまだ、詩織が九歳の時であった。キャンプ先に連絡が入り、詩織一人帰らされた。その日は既に葬式が行われていた。白い布に包まれた、小さな箱が二つ。父と母はこの中だと聞いた。その前に座らされて、何のことだか分からなかった。父方にも母方にも親戚はいなかった。それぞれ両親はなく、父も一人息子、母も幼いころ二つ上の兄を亡くしていた。詩織はこの世にたった一人、残されたのだった。

すべて隣近所の人たちが取り仕切ってくれた。母と仲の良かった隣のおばちゃんに、詩織は聞いた。

「おばちゃん。お父さん、お母さんはどこに行ったの？」

おばちゃんは涙をいっぱいためた目で詩織をじっと見つめたまま、言葉が出ない様子であった。その顔を見て、詩織は質問をすることを一切やめた。

葬式が済んで、近所の人たちが額を集めてひそひそと話をしている。おばちゃんが詩織の手を引いて外に連れ出した。星月夜であった。零れ落ちそうなほどの、満天の星が輝いている。ぎっしりと轟く大小の星の光が詩織の頭上に降り注ぎ、それは空との距離を近く感じさせた。

「詩織ちゃん。お父さんとお母さんはね。あの星たちの仲間入りをしたの。どれだろうね。二つ仲良く並んでいるはずよ。昼間は明るくって見えないけど、ああやって、いつも詩織ちゃんを見守ってくれてる。だから詩織ちゃんはちっとも寂しく思うことないの。何かあったら、空を見上げなさい。お父さんとお母さんに会えるから」

おばちゃんの声は震えていた。詩織はおばちゃんを見上げて、おずおずと不安そうに聞いた。

「おばちゃん。私も仲間入りできない？」

おばちゃんは喉を詰まらせて、しばらく無言でいた。

「……いいえ、仲間入りできないよ。お父さんとお母さんがだめだって」

「どうして？」

「詩織ちゃんが大きくなったら分かる。詩織ちゃんが立派な大人になるのを見守ってくれてるんだからね」

「……うん。分かった」

おばちゃんと詩織はしっかり手を握り合ったまま、いつまでもきらめく星空を仰ぎ見ていた。

東京に来て、夜空を見上げてはみるものの、あのような星空は見たことがない。いつものっぺらとした灰色の空であった。

(こんな空を見たってしょうがない)

そのうち詩織は空を見上げることを諦めた。宮崎に帰って、あの星空が見たい。無性にそう思った。

父母が亡くなった、その一年前のことであっただろうか。梅雨入りが間近い初夏の週末であ

った。親子三人で蛍を見に行った。山間に入った、溪谷である。はしゃいで回る詩織に微笑みながら、父はテントを張り、母は朝早くから作ったお弁当を開いた。

「ねえ、お母さん。きれいな川ねえ。底が見えるよ。蛍がいっぱいいるんでしょう。蛍、捕まえて持って帰ってもいいかな」

「さあ、それはどうかな。きつとここが蛍の住まいなんだよ。家族や仲間がいっぱいいる。ここがやっぱりいいと思うよ。持って帰っちゃかわいそうでしょ」

「あっ、そうか。そうだね。じゃ、見るだけにするよ。早く暗くならないかなあ」

山の中の、夜のキャンプ地。黄緑の光を瞬かせて、無数の蛍が乱れ飛ぶ。川に沿った樹木の中は、まるで満天の星のようにきらめいていた。父の膝の上に抱かれ蛍を眺めるうち、詩織はいつしか眠りに落ちた。

満天の星も、無数の蛍も遠い昔の思い出である。そうだ、あのときのたった一匹の蛍。すっかり忘れていた、幼い日のひとこまが鮮明に蘇った。

あれは、両親が亡くなったので帰るよう連絡が入った、その前日の夜であった。夏休みの林間学校である。校舎の中にたった一つの黄緑色の光が舞い込んだ。

「あっ、蛍だ」

布団を敷き並べ、眠りにつこうとしていた子供たちは起き上がり、その光を追った。ふらりふらりと弧を描いて空間を舞う、たった一匹生き残った蛍。その一匹の蛍と自分の姿とが思い重なった。

東京の空を見上げるのをやめてから、詩織は瞼の裏の夜空の星に、よく問いかけたものだった。

（お父さん、お母さん、何で私だけ独りぼっちなの？）

病床の母が落ち窪んだ目をうつすらと開けた。

「ああ、お母さん。目が覚めた？」

「詩織、ごめんね。お願いがあるの」

「いいよ、なあに？」

「お父さんと、修一と、浩二のことお願いしたいの。あなたしかお願いする人いないし」

「うん、分かってる。大丈夫よ。心配しないで」

母はかすかに微笑んで、「ああ、浩二はもう大丈夫ね。元気になってくれて、それだけは嬉しいわ。浩二は優しいいい子だから、詩織こそ浩二を頼りにしなさい」

少し話をしても辛くなるのか、浅い息遣いをしながら、しばらく博子は口を噤んだままでいた。

「ねえ、詩織。人を恨んじゃだめよ。運命を恨んじゃだめ。人間って、与えられた人生を生きるしかないの。どんなに辛くても、逃れることはできない。それなら、その与えられた人生をどれだけ真剣に生きるかということだと思う。詩織が幸せになることを心から願っているけれど、もう私には何もしてやれないし、そばで見守ることさえできない。ほんとに、ごめんね。許してちょうだいね」

骨ばかりのゴツゴツした母の手を、詩織は握り締めた。母は安心したように目を閉じた。これ

が言いたくて私を呼んだのかと、母の思いが心に沁みた。苦しい病状にありながら、考えることは家族のことばかりなのだ。母は昔からずっとこうだった。

(この人は、きっと死ぬまで人のことしか考えないんだ)

詩織は優しく母の手をなでた。

生と死、命とは

浩二は言葉もなく見つめていた。急に白髪が増え頬骨が目立つようになった、どす黒くも見える父親の顔であった。

父の話がまるで遠い、自分には無関係の物語のように聞こえた。詩織の出生の秘密。あの心ひそかに愛しく思い続けてきた詩織が、本当の兄妹だったとは……。そしてその詩織は、実の兄、修一の子を宿している。何という悲劇であろう。

大阪に逃れた浩二は心癒えることなく、ただ毎日が無意味に過ごしていた。そのあげくの、点検を怠った単純ミスによる事故であった。心の底に自暴自棄な思いがあったことも否定できない。

しかし、意識が戻ったときに目に飛び込んだ父の悲しげな顔を見たとき、浩二は自分を取り戻した。ああ、自分は生きなきゃいけないんだ、そう思った。自分の死を悲しんでくれる人がいたことに気が付いたのだ。

それからというもの、浩二は人が変わったように生きることに貪欲になった。医者から少しセーブするよう言われるほど、リハビリに励んだ。周囲が目を見張るほどの回復の速さであった。

しかし、東京に帰って詩織の張り出したお腹を見たとき、浩二はまたもや心が沈み込むのを覚えた。父の話聞くまで、浩二は心の中の葛藤に苦しんでいた。そのうち、一人アパートを借りて、この家を出ようと考えていたのである。

父の苦悩に満ちた表情を見ながら、浩二は自分の浅はかさを思い知った。母は病床に倒れ、兄の修一は社会的にも挫折して、心の病に逃げ込むまでになってしまった。そのすべての原因を、自分のせいだと打ちひしがれている父の姿は哀れであった。

今この葉山家の窮状を救うのは自分しかないではないか。女々しく悩んでいる場合ではなかった。浩二は何かしらふっ切れた思いであった。

沈鬱な重い空気の漂う夕餉である。無言で箸を動かす疲れの滲み出た青黒い顔色の父と、淡々とご飯をよそう詩織。詩織は母がしてきた通り、家族のそれぞれの好みを盛り込んだ料理を並べ、手を抜くことなく主婦を勤めている。その詩織を見ながら浩二は思った。子供を望んで作るのはいいけれど、子供の権利とは何だろう。生まれ出る者に選択の余地はないのだ。必然的に運命を背負わされるほうの権利はないのか。いまだに何も知らない詩織。周りの反対にもめげず、実の兄の子供を産もうと必死である。

これでいいのだろうか、浩二の心に疑問が湧く。しかしもう、臨月に近い。今更どうしようもない。

(自分が大阪に逃げなかったら何とかなっていただろうか。いや、……)

一番の被害者は詩織自身じゃないかと、憤りに似た思いが募った。浩二は、詩織の人生の重荷を共に背負う覚悟を決めた。自分のできる限りを尽くすつもりであった。

博子は悶え苦しんでいた。その合間にうつらうつらと眠る。そして、修一と浩二の名を呼んだ。その声を聞きながら、孝秋はどうすることもできない。小康状態のときには、なぜか博子は修一のことを一切聞こうともしなかった。全く顔を出さない修一が、のっぴきならない状態だと察

知しているようであった。修一は入院してますます病状は悪化し、自分を傷つけようとするらしい。壊れた精神は自分自身を破壊させようとしているのか。一時的な外出の許可など取れそうもなかった。

さわやかな風が春の気配を感じさせる朝、珍しく随分楽な様子の博子に、孝秋も久しぶりに心休まる思いで声を掛けた。

「今日は気分がよさそうだね」

「ええ、今日はとっても楽よ。ねえ、あなた。お庭の梅はまだ咲いてない？」

「ああ、そろそろだろうがね。そうだ、咲いたら切って持ってきてやろう」

「昔よくお弁当作って、親子四人で砧公園に行ったわね。あそこの桜はとてもきれいだった」

「ああ、そうだった。修一も浩二も小さかったな」

「浩二はよちよち歩きで。修一が横を走り回る勢いでころんじゃって、泣きじゃくって。修一は浩二をなだめるのに必死で。でも、二人ともいい子だった。時計の針が戻せるものなら、あのころに帰りたいな」

「……。博子、お前には苦勞ばかり掛けて、本当に済まなかった。許してくれ」

「何を言うの。夫婦なんだから。一緒に苦勞するのは当たり前よ」

「いや、当たり前じゃないことをさせてしまった。どう償いようもない」

「……。いいの。もう何も言わないで」

そうして、梅の開花を待つことなく、博子は静かに息を引き取った。

詩織がそろそろ買い物に行こうかなと思ったそのとき、玄関の戸が激しい音を立てて開いた。どこをほつつき歩いていたのか、孝秋が帰ってきたのである。続いて台所でごそごそしている。いきなり居間のふすまが開いた。

「何だ、詩織。飯の用意はまだしとらんのか」

「お父さん、まだ四時ですよ。もうお腹すきました？」

「うるさい！ 早く飯を作れ」

母の博子が亡くなってからというもの、どうも孝秋の様子がおかしくなった。痴呆が始まったらしかった。何をすることもなく、日がな一日ぼんやりしている。それが最近では更にひどくなって、姿が見えないと思ったら、どこやら徘徊しているらしい。ふらりと帰ってくると、時間かまわず「飯！」と要求する。食べ始めると、「まずい。こんなもの食えるか」と、お皿ごと投げ散らすのである。たまったものではない。

詩織は既に臨月のお腹を抱えていた。もう母がいない今、だれに相談することも頼ることもできない。保育科に学んだことが幸いであった。一人ですべて出産の準備を整えた。

今日もまた食い散らかしたまま、孝秋の姿は消えていた。詩織は予定日には早いものの、どうも今日あたりが危ない気がしていた。いつでも入院できるように用意をし、その時を待つ。やはり、繰り返しの陣痛が来て、だんだんその合間が短くなった。孝秋はまだ帰ってこないが、仕方がない。冷蔵庫にたくさんの食べ物を詰め込み、テーブルの上に置手紙を残した。浩二の会社に電話を入れたが、出張中であつた。出先への連絡を頼み、隣にも留守を頼んで、タクシーを呼

び病院に行くと、すぐ入院ということになった。

その日の夜遅く、女の子が生まれた。詩織の心のうちにも密かな不安があったが、五体満足な元気な子であった。母になった喜びが胸いっぱい広がった。

次の日、浩二が飛んで帰ってくれたらしく、緊張した顔付きで病室に入ってきた。

「ああ、詩織。大丈夫かい」

「ええ、大丈夫よ。ほら、赤ちゃん、見てやって」

妙にお尻を残して上体だけを伸ばし、恐る恐る赤ちゃんを覗く浩二に、詩織は思わず吹き出した。

「ふーん。ちっちゃなもんだな。なんだか、しわくちゃだよ」

そのちっちゃな指や足やしわくちゃな顔を、いつまでも神妙に眺め回している浩二を見て、詩織はふと思った。本当はその姿は修一のはずだった。詩織の心を寂しい風がずっと吹き過ぎた。

詩織の身体は順調に回復した。子供も何の問題もなく成長している。

子供は「望美」と名付けた。誕生から一週間後、詩織は望美を抱いて退院した。家の中は悲惨であった。まるで泥棒に引掻き回されたかのように、ひどい散らかりようである。浩二が休日ごとに片付けても間に合わないのであった。詩織は無理をしないように少しずつ片付けていった。孝秋の状態は更にひどくなっていた。詩織が何も食べさせてくれないと、近所の人に言い触らしているらしい。

詩織が洗濯物を畳んでいると、例のごとくどこへやら徘徊していた孝秋が帰ってきた。詩織の顔を見るなり、孝秋は嗚れ声で怒鳴った。

「詩織！ 飯はまだか」

「お父さん、ちょっと待ってよ。さっき食べたばかりでしょ」

「なに、口答えするんじゃない。何という恩知らずな奴だ。お前はこの私を餓死させる気か」

そう言うと、いきなり詩織の肩を足蹴にした。倒れた詩織の背中や腰を更に蹴りつける。鈍く腰が鳴った。

「やめて、お父さん」

うずくまったままの詩織に憎々しげな視線を浴びせながら、孝秋は吐き捨てるように言った。

「詩織。お前はな、教えてやろうか。お前は、試験管から生まれた子供だ。お前を産んだ母親なんか、私は知らん。はっはっはっ。お前なんか、生まれてこなければよかったんだ」

孝秋はそう言うなり、激しい足音を立てて部屋を出て行った。

詩織はしばらく動けなかった。優しくした父に暴力を振るわれたこともショックであったが、父の言葉に混乱していた。自分が何を言われたのか、理解ができなかった。

(一体何のことなの)

随分、時間が流れた。詩織がゆっくりと上体を起こしたとき、その両の目から涙があふれて零れ落ちた。孝秋から蹴られて痛む腰を押さえながら、詩織は奥の間に這っていった。ベビーベッドに眠るわが子のところまで行き、望美の顔を覗き込んだ。

「望美……」

望美の寝顔は安らかであった。その愛らしい小さな手を取って、詩織は宮崎の父母を想った。詩織の思い出はいつも父の膝の中であった。父は優しくした。父の子ではなかったとはとても信

じられないほど、父は自分をかわいがってくれた。

周囲の視線を無視して、詩織は望美を産んだ。その望美の愛らしい寝顔を見つめながら、いかに亡き父や母が自分の出生を望み、そして愛し育ててくれたかをひしひしと感じた。たとえ人の精子であったにしろ、切望された自分の出生であったのだ。

それなのに、幼い詩織を残して二人は亡くなった。何と運命とは皮肉なものであろう。今詩織は、望んでくれた父母の思いとは全く逆に、それを恨みにさえ思う感情が湧き出ている。そのとき、育ての母、博子の言葉が心に浮かんだ。「恨んじゃだめ。与えられた人生を生きるしかない」、そう言い残した博子。

(そうか、これが私に与えられた人生だったのか。でも、それにしてもあんまりだ。背負って生きるのは、生まれてきたこの私なんだもの。ああ、私ばかりじゃない。望美までが……)

望美が大きく成長したときに、果たして自分の出生を喜んでくれるだろうか、と詩織は悲しい思いに沈んだ。

「望美。お前も私も生まれてこなければよかったね」

望美のふっくらとした小さな掌の上に、詩織の涙がぽつんと落ちた。

宮崎の山間をかなり入ったところに、身寄りのない子供たちを預かる施設がある。その子供たちから特に慕われている保母がいる。

詩織であった。にこやかに、母のように細やかに、愛情を子供たちに注ぐ詩織がそこにいた。詩織の子、望美もその子供たちに交ざって部屋の中を危なっかしく歩き回っている。望美は皆にかわいがられ、いつもきゃっきゃと声を出して笑っていた。

孝秋は老人ホームに預けられた。詩織と離れると、孝秋は急におとなしくなったらしい。看護婦の手を煩わせることもなく、静かに余生を送っていると聞く。

詩織は宮崎に帰る前、迷いに迷ったあげく、望美を抱いて修一に会いに行った。看護師に付き添われて面会室に入ってきた修一は、痩せ細って見る影もなかった。

「お兄さん、望美よ」

修一はとろんとした目を望美に向けた。口がだらしなく開いたままだ。不思議なものでも見るように見つめていたが、しばらくして興味なさそうに目を背けた。

「お兄さん、私宮崎に帰るの。もう会えないかもしれないけど……。お兄さん、元気でね。……」

それ以上の言葉を失って、詩織は椅子から立ち上がった。そのとき、修一が悲しそうに目を伏せた気がした。詩織はしっかりと望美を抱き締め、溢れそうになる涙をこらえて部屋から走り出した。

修一はその後、目は離せないものの何とか落ち着いているという。退院後、父も母もいない家で修一はどうなるのであろうと心配ではある。かと言って、自分たちと一緒に暮らせるはずはないと思う。

(兄の前からは姿を消したほうがいい。兄のためにもそのほうがいい)

心が引き裂かれる思いの決断であった。

今は浩二だけが頼りであった。詩織が宮崎に帰る決意を話したとき、浩二は澄んだ目で力強く頷きながら言った。

「ああ、よく決心したね。それが一番いいかもしれない」

東京を去る日、浩二が空港まで送ってくれた。望美を抱き取って、浩二が柔らかなその頬をつついた。「ひゃっひゃっ」と望美が満面を崩して笑う。浩二の顔は、逆に寂しそうに歪んだ。

搭乗の時刻が迫ってきた。望美を詩織に返して、浩二が真剣な顔で言う。

「詩織、君は僕の大事な妹だ。何かあったら、すぐ電話くれよな。困ったことができたら、僕が何でもするからな。いいかい？ 分かった？」

「うん、分かった。ありがとう。本当にありがとう」

搭乗ゲートをしばらく行って後ろを振り返ると、身じろぎもせず佇む浩二の姿が見えた。振り返った詩織に気付いたのか、浩二が手を挙げかすかに振った。詩織に熱いものがこみ上げた。後押ししてくれる人がいる。思えば、幼いころ葉山家に貰われてきてからずっと、浩二は自分を守ってくれた。

痴呆の孝秋に暴力を受けたとき、詩織は自分の出生の秘密を知ってしまった。あの日、涙も涸れ果てて、望美のベビーベッドの脇で気が抜けたように座り込んでいた。会社から帰った浩二は詩織の様子に驚いて何があったのかと聞いた。うつむいてぼつりぼつりと話すのを、浩二はただ黙って聞いていた。話し終わってもまだ無言のままの浩二に、詩織は不思議に思って目を上げた。その目をしっかり受け止めるかのように見つめながら、浩二は口を開いた。

「お母さんが亡くなる少し前かな。お父さんから、全部聞いていたよ。でも、今日はずらかったね。まさかお父さんがそんな事をするとは僕も思わなかった。でも、お父さんもずっと苦しんでたんだ、きっと。お母さんや兄さんの事もあって、あんなになっちゃって……。ごめんね、詩織。お父さんのこと、許してあげられるかな？」

詩織の目にまた涙が溢れ、浩二の胸に泣き崩れた。その肩を抱き、浩二は優しく言った。

「どんな生まれ方と聞いても、詩織が僕の妹だって事に変わりはない。いや、本当の妹だったんだから、なおさら嬉しかったよ。いいじゃないか。詩織は詩織だ。詩織は詩織らしく生きればいいんだ。僕は兄として、どこまでも応援するよ」

背中を撫でる浩二の手は温かかった。

昔詩織を預かってくれた施設は、詩織の申し出を快く受け入れてくれた。詩織は望美も他の子ども、別け隔てなく愛した。親のない恵まれない子供たちに、ありったけの愛を注いでやりたかった。今、詩織はだれを恨んでいるわけでもない。人は皆、それぞれ与えられた人生を一所懸命生きるだけなのだ。ただそれだけのこと。

詩織は夜になると、望美を抱き外に出て空を眺める。仰ぎ見るその瞳には、零れんばかりの星が輝いていた。